慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	解熱鎮痛消炎剤における製造品目数の比較
Sub Title	A repot on analgesic-antipyretic drugs in the past ten years
Author	福島, 紀子(Fukushima, Noriko) 渡辺, 葉子(Watanabe, Yoko)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1989
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.34 (1989.) ,p.33- 38
Abstract	
Notes	原報
Genre	Technical Report
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000034-0033

共立薬科大学
Ann, Rept. Kyoritsu
Coll. Phrm.

解熱鎮痛消炎剤における製造品目数の比較

福島紀子，渡辺葉子

A repot on analgesic-antipyretic drugs in the past ten years

Noriko FUKUSIMA, Yoko WATANABE

The number of pharmaceutical products on the current market has exceeded tens of thousands. The enormous figures are due to the fact thet a product under a non-proprietry name has various different proprietry names according to its manufacturer. We have conducted an extensive survey on the number of both non-proprietry and propietry names of the anti-pyrectic and anti-flammatory analgesics entered in "Health insurance price list" in 1979 and 1989. We have also compared their active ingradients to see the product trends in the past ten years.

はじめに

現在流通している医薬品は，約1万数千品目を越えている。これは，一つの一般名（成分名）に対して商品名が多数存在することにもよる。今回，現在保険薬として扱われている医薬品の中で，解熱鎮痛消炎剤について，1989年の薬価基準収載品をもとに，現在の状況を調査した。また1979年の収載品との比較もおこなった。膨大な薬の中のほんの一部ではあるが，薬の動向などを見ることが出来たので，ここに報告する。

1. 解熱鎮痛消炎剤の種類

1） 一般名による比較

現在発売されている医療用医薬品の中から解熱鎮痛消炎剤について，1989年版「薬価基準」（以下，資料1）を基に一般名，商品名を調査した。資料1は，健康保険法の規定による診療報酬点数表に基づく使用薬剤の購入価格等についてまとめたものであるが，国民皆保険の体制が一応完成していることから，現在使用されているほとんどの医薬品を網羅できていると思われる。今回は分類として，内用剤，注射剤，坐剤とし，外用剤，歯科用薬剤については除外した。解熱鎮痛消炎剤の中の単一成分の構造系及び一般名とその商品名数を表-1に示した。尚，構造分類は，医薬品便覧（資料2）に従った。10年前との比較をするために，1979年4月の薬価基準収載品についての集計結果を表-2に示す。商品名が同じでも販売会社が違うものは別とし，販売会社が同じで同一商品名のものでも，容量が違うものは別として集計した。

1989年（表1）は，一般名としては64あり，その中で11局収載は14であった。そして会社別商品名の数は724であった。1979年（表2）では，一般名数は39，品目数は577であった。9局収載品は12種類であった。

構造別にみると1989年のピラゾロン系の合計が74であるのに対し，1979年は200であっ

表-1 一般名に対する商品名数（1989年薬価基準収載品）

構造分類	局方品	一般名	末・散	細粒剤	顆粒剤	錠剤	カプセル剤	シロップ剤	注射剤	坐剤	合計
アニリン系	・	アセトアミノフェン	7	1						8	16
		トルフェナム酸					1				1
	・	フェナセチン	18								18
		フェニルアセチルグリシンジメチルアミド				1					1
アントラニール酸系	・	メフェナム酸	4	4		5	18	5			36
		ジクロフェナクナトリウム		1	1	45	2			3	52
		フルフェナム酸				6	9				15
		フルフェナム酸アルミニウム				10	2				12
		フロクタフェニン				1					1
サリチル酸系	・	アスピリン	20		1	3				15	39
	・	アスピリンアルミニウム	3	1							4
		アスピリンDL-リジン							1		1
	・	エテンザミド	4								4
		サリチル酸コリン						1			1
		サリチルアミド	1								1
	・	サリチル酸ナトリウム	1						7		8
		サザピリン				1					1
ピラゾロン系		アミノピリン								2	2
	・	アンチピリン									0
	・	イソプロピルアンチピリン	1								1
		クロフェゾン				1					1
		ケトフェニルブタゾン				6					6
	・	スルピリン	22						25	16	63
	・	フェニルブタゾン				1					1
フェニル酢酸系		アルクロフェナク		1		7	6				14
	・	イブプロフェン	1	12	14	64	1				92
		ナプロキセン		2		13	1				16
		フルルビプロフェン			1	4					5
		ケトプロフェン		1		2	24		4	8	39
		フェンブフェン				8					8
		アンフェナクナトリウム					1				1
		アルミノプロフェン				2					2
塩基性消炎剤系		塩酸チノリジン				1	2				3
		塩酸ベンジダミン				16					16
		メピリゾール		1	5	17					23
		塩酸チアラミド		7		29					36
		クエン酸ペリソキサール				1					1
その他	・	インドメタシン					37			79	116
		アセメタシン					1				1
		マレイン酸プログルメタシン					1				1
		グラフェニン				1					1
		塩酸レフェタミン				1					1
		トルメチンナトリウム				2					2
		ブコローム					1				1
	・	ペンタゾシン							7		7
		塩酸トラマゾール							2		2
		メシル酸ジメトチアジン				12	1				13
		メチアジン酸					2				2
		プロチジン酸					1				1
		スリンダク				2					2
		プラノプロフェン					1				1
		フェノプロフェンカルシウム				2					2
		ピロキシカム					4			3	7
		フェンチアザク				2					2
		エモルファゾン				2					2
		塩酸ブプレノルフィン							2		2
		ジフルニサル				2					2
		チアプロフェン酸				2					2
		オキサプロジン				4					4
		酒石酸ブトルファノール							2		2
		ロベンザリット・二ナトリウム				2					2
		ロキソプロフェンナトリウム		1		1					2
		臭化水素酸エプタゾシン						1			1
		テノキシカム				2					2
		合計	82	32	22	281	116	7	50	134	724

た。10年前はピラゾロン系が主流をなしていたことがうかがえる結果である。しかし，1977年にアミノピリンの発ガン性情報が「厚生省医薬品情報」[1]に報告されており，そのわりには，まだ数が多く企業の対応が遅れているように思える。

2） 剤形別分類の比較

全合計の剤形別分類比較は，図-1に示したが，1979年では，錠剤40.6%，末・散剤22.9%となった。錠剤で一番多いのは，塩酸ベンジダミンの52で，次がイブプロフェンの46であった。前者は現在16品目しか収載されていない。末・散剤で一番多いのはスルピリンの29，次がアミノピリンの27であった。現在アミノピリンはほとんど使用されなくなっており坐剤のみで

表-2 一般名に対する商品名数（1979年薬価基準収載品）

構造分類	局方品	一般名	末・散	細粒剤	顆粒剤	錠剤	カプセル剤	シロップ剤	注射剤	坐剤	合計
アニリン系	・	アセトアミノフェン	4								4
	・	フェナセチン	23								23
アントラニール酸系		メフェナム酸	2			1	12	1			16
		ジクロフェナクナトリウム				14					14
		フルフェナム酸			1	9	41				51
		フルフェナム酸アルミニウム				2					2
サリチル酸系	・	アスピリン	26			1				6	33
	・	アスピリンアルミニウム	6			7					13
	・	エテンザミド	1								1
		サリチル酸コリン						1			1
		サリチルアミド	1								1
	・	サリチル酸ナトリウム	5					2			7
		サザピリン				1					1
ピラゾロン系	・	アミノピリン	27							12	39
		クロフェゾン				1					1
	・	アンチピリン	3								3
		ケトフェニルブタゾン	1			29	2				32
	・	スルピリン	29						45	2	76
	・	フェニルブタゾン				23	1				24
	・	オキシフェンブタゾン				10				4	14
		ニコチノイルアミドアンチピリン			1	10					11
フェニル酢酸系		アルクロフェナク				2	2				4
		イブプロフェン	4	7	16	46	5				78
		ナプロキセン				1					1
		フルルビプロフェン				1					1
		ケトプロフェン					1				1
塩基性消炎剤系		塩酸チノリジン					1				1
		塩酸ベンジダミン				52	1				53
		メピリゾール		2		5					7
		塩酸チアラミド				2					2
		クエン酸ペリソキサール				1					1
		塩酸フェニラミドール				1	1				2
その他	・	インドメタシン					10			22	32
		塩酸レフェタミン				1					1
		トルメチンナトリウム				2					2
		プコローム				1	1				2
		ペンタゾシン							6		6
		メシル酸ジメトチアジン				11	1				12
		メチアジン酸					4				4
		合計	132	9	18	234	83	4	51	46	577

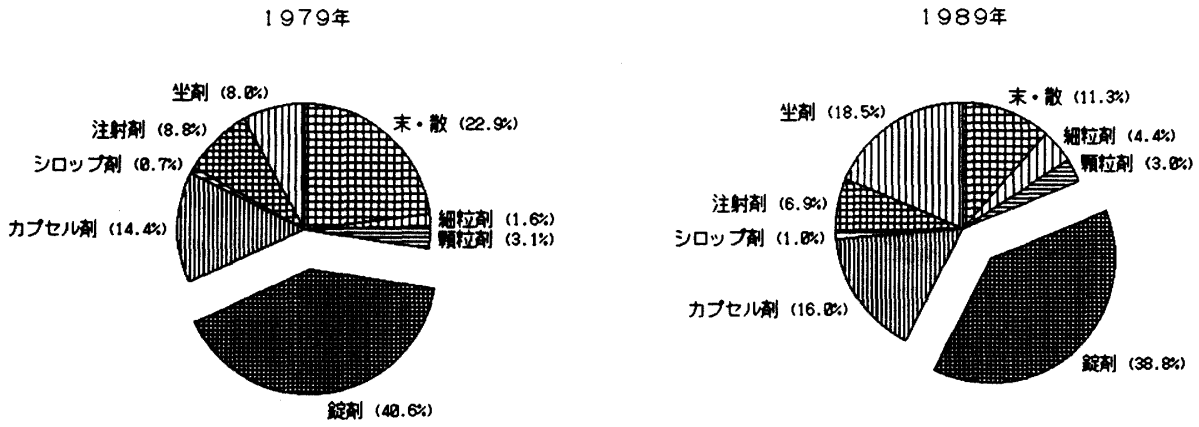

図-1 剤形別分類の比較

ある。

1989年では，錠剤が38.3%，ついで坐剤が18.5%となっている。ここ10年で坐剤が急増していることが分かる。錠剤で一番多いものはイブプロフェンの64，次いでジクロフェナクナトリウムの45であった。坐剤はインドメタシンがとびぬけて多く，商品名の数は79であった。

3） 製造品目上位のものの比較

一つの一般名に対しての製造品目の多い順に5位までの一般名とその剤形別の累計を1979年

のものを図-2に，1989年のものを図-3に示す。イブプロフェンとスルピリンは10年間コンスタントに需要があったことがうかがえるが，他の3成分は入れ替わっている。現在はインドメタシンが116と一番多く製造されていることが分かる。そして製剤別にみるとインドメタシンはカプセル剤と坐剤だけであり，カプセル剤37品目のうち20品目が徐放剤であった。これはインドメタシンの硬カプセルは副作用の発現頻度が高いため最近ではその改善のための徐放性カプセルの使用頻度が多くなっていることによる[2,3]。

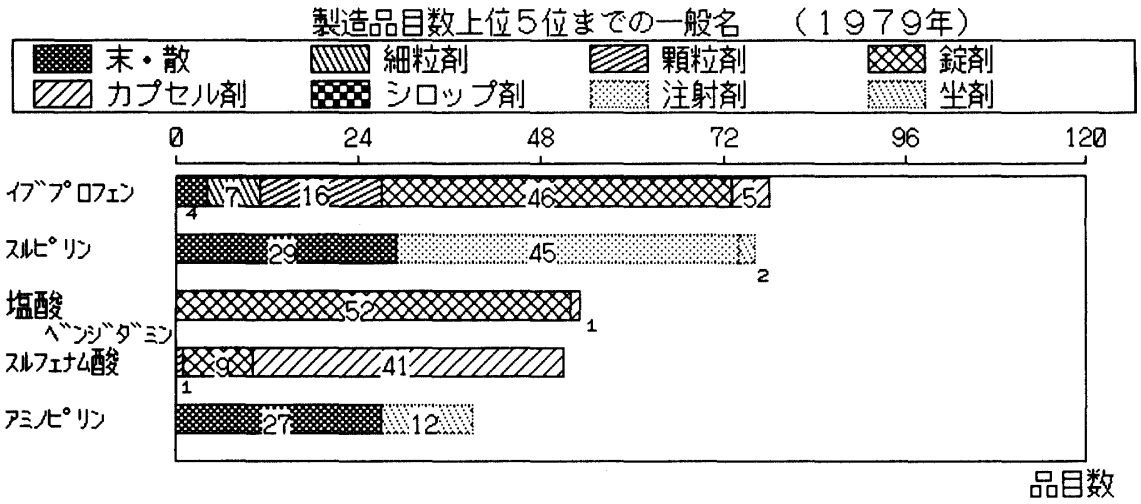

図-2　製造品目上位5位までの一般名（1979年）

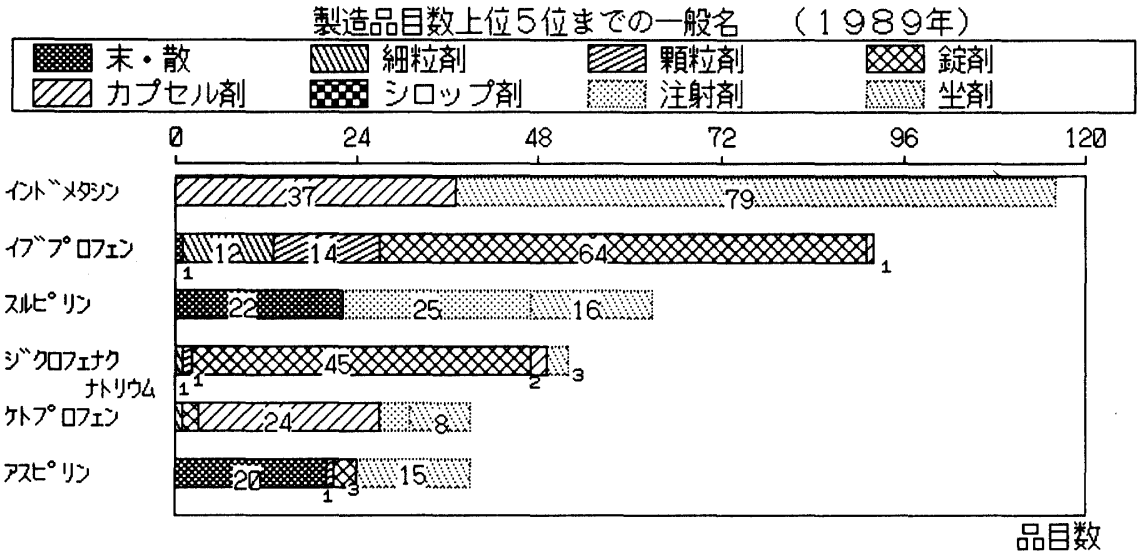

図-3　製造品目上位5位までの一般名（1989年）

2. 現在の解熱鎮痛消炎剤の動向

薬事日報が毎年，内科・整形外科医を中心に臨床医が選ぶ非ステロイド性抗炎症剤をアンケート調査している。（資料3）表-3は，1988年と1989年の結果を基にその一般名で示してある。

インドメタシンは，10位までの中に2品目含まれており，臨床的にも使用頻度の多いことが分かる。その他ジクロフェナクナトリウム，イブプロフェン，メフェナム酸等も商品名の多いものである。これらは発売以来15年以上たったものばかりで，臨床で長い使用経験があり使いやすいためであると思われる。しかし，上位にランクされているロキソプロフェンナトリウム，ピロキシカム，スリンダク，オキサプロジンは製造品目数が少ないものばかりである。これらの再審査終了期間を表-4に示したが，すべて承認されてまだ間がなく，再審査中であるか終了したばかりりものである。(資料4）後発品が出回るのはこれからのことであろうと思われる。オキサプロジン，ロキソプロフェンナトリウムについてみると，発売されて1年後には上位にランクされており，普及の速さにおどろかされる。

表-3 臨床医が選ぶ非ステロイド性抗炎症剤ベスト10（資料3　参照）

	1988年	1989年
1位	ジクロフェナクナトリウム	ジクロフェナクナトリウム
2位	スリンダク	ロキソプロフェンナトリウム
3位	ピロキシカム	ピロキシカム
4位	ロキソプロフェンナトリウム	スリンダク
5位	インドメタシン徐放	インドメタシン
6位	ナプロキセン	イブプロフェン
7位	アセメタシン	メフェナム酸
8位	インドメタシン	ナプロキセン
9位	フェンブフェン	オキサプロジン
10位	プラノプロフェン	インドメタシン徐放

表-4 再審査に関する承認年月日（資料4　参照）

	再審査対象効能効果等の承認年月日	再審査期間	満了期日
ﾛｷｿﾌﾟﾛﾌｪﾝﾅﾄﾘｳﾑ	1986年3月	6	1992年3月
ﾋﾟﾛｷｼｶﾑ	1982年6月	6	1988年6月
ｽﾘﾝﾀﾞｸ	1981年12月	6	1987年12月
ｵｷｻﾌﾟﾛｼﾞﾝ	1985年8月	6	1991年8月

まとめ

今回，薬価基準に収載されている一般名，商品名の数を調べてきたが，10年間の間に，削除されたものを考慮に入れると，新成分として29もが承認されてきたことになる。商品名数としては174品目増えたことになる。これは医薬品の中のほんの一部の傾向であり，医薬品全体を考えると承認されているものはかなりの数になると思われる。1978年に薬価収載が統一限定収載方式より，銘柄別薬価収載に変更されたことで，先発品と後発品に薬価の差がつくようになった。そのことから後発品が不利となる現象が生じ，新医薬品の開発がますます盛んに行われるようになっているようである[4)]。

現在使用されている解熱鎮痛消炎剤の一般名の数は10年前の約2倍の数になっている。その中でも局方収載品をみてみると，わずかに2成分増えただけである。

新聞のアンケート調査より新医薬品もかなり早い時期に臨床の現場で使用されているこのがわかり，局方が医療の現場であまり参考にならず，使用される割合が少ないことも納得できる結果であった[5)]。もっと局方を活用させるには新開発医薬品の早期収載が望まれる。

参考資料

資料1　薬価基準（平成元年4月版）新日本法規出版
　　薬価基準（昭和54年4月版）
　　新日本法規出版
資料2　医薬品便覧4大阪府病院　薬剤師会
資料3　薬事日報P13　1989.　7.15
　　薬事日報P13　1988.　7.14
資料4　安全対策業務マニュアル　厚生省薬務局安全課

参考文献

1）厚生省医薬品情報No. 7（1977）
2）柳川　明ら：Vol. 37，No. 7，827（1986）
3）山田和司ら：薬局 Vol. 37，No. 7，837（1986）
4）中村玉枝：社会薬学 Vol. 8，No. 1，5（1989）
5）薬務局安全課：月刊薬事 Vol. 31，No. 7，83（1989）